江木欣々女史

長谷川時雨

青空文庫

一

大正五年の三月二日、あたしは神田淡路町の江木家の古風な黒い門をくぐっていた。

旧幕の、武家邸の門を、そのままであろうと思われる黒い門は、それより二十年も前からわたしは見馴れているのだった。わたしは日本橋区の通油町というところから神田小川町の竹柏園へ稽古に通うのに、この静な通りを歩いて、この黒い門を見て過ぎた。その時分から古い門だと思っていたが、そのころから、江木氏の住居かどうかは知らなかった。

「この古い門のなかに、欣々女史がいるのですかねえ。」

連立った友達は、度の強い近眼鏡を伏せて、独り笑みをしていた。

「冷灰博士――そっちの方のお名には、そぐわないことはないけれど」

友達が言うとおりだった『冷灰漫筆』の筆は、風流にことよせて、サッと斬りおろす、この家の主人の該博な、鋭い斬れ味を示すものだった。だが、今を時めく、在野の法律大家、官途を辞してから、弁護士会長であり法学院創立者であり、江木刑法と称されるほどの権威者、盛大な江木衷氏の住居の門で、美貌と才気と、芸能と、社交とで東京を背負っている感のある、栄子夫人を連想しにくい古風さだった。しかしまたそれだけ薄っぺらさもなかった。含みのある空気を吸う気もちであった。

たそがれ時だったが、門内にはいるとすっかり暗くなった。梅が薫ってくる。もう、玄関だった。

広い式台は磨かれた板の間で、一段踏んでその上に板戸が押開かれてあり、そこの畳に黒塗りぶちの大きな衝立がたっている。その後は三間ばかりの総襖で、白い、藍紺の、ふとく荒い大形の鞘形――芝居で見る河内山ゆすりの場の雲州松江侯お玄関さきより広大だ、襖が左右へひらくと、黒塗金紋蒔絵のぬり駕籠でも担ぎだされそうだった。

「これはどうも――平民は土下座しないと――」

と、平日は口重な、横浜生れではあるが、お母さんは山谷の八百善の娘であるところの、箏の名手である友達は、小さな体に目立ない渋いつくりでつつましく、クックッと笑った。

気持ちの好い素足に、小倉の袴をはいた、と五分苅りの少年書生が横手の襖の影から飛出して来て広い式台に駈けおりて、

「どうぞ。」

と、招いた客の人相をよく言いきかされて、呑込んでいるように笑顔で先導する。

次の間には、女の顔が沢山出むかえた。

「さあ、こちらへ、さあこちらへ。」

招じられた客間は、ふかふかした絨毯、大きな暖炉に、火が赤々としていた。

春には寒い――日本の弥生宵節句には、すこしドッシリした調子の一幅の北欧風の名画があったともいえようし、立派な芝居の一場面が展開されるところともいえもしよう形容を、と見るその室内は有っていた。

欣々夫人の座臥居住の派手さを、婦人雑誌の口絵で新聞で、三日にあかず見聞しているわたしたちでも、やや、その仰々しい姿態に

足を止めた。

客間の装飾は、日本、支那、西洋と、とりあつめて、しかも破綻のない、好みであった、室の隅には、時代の好い紫檀の四尺もあろうかと思われる高脚の卓に、木蓮、木瓜、椿、福寿草などの唐めいた盛花が、枝も豊かに飾られてあった。大きなテーブルなどはおかないで、欣々女史はストーブに近くなかば入口の方へと身をひらいて、腕凭椅子のゆったりしたのにゆったりと凭りかかっていた。

彼女は、驚嘆したであろう客の、四つぶの眼の玉を充分に引きよせておいて、やおら身じろぎをした。立上って、挨拶をしようとするのだ。

それまでに、わたしたちは、充分に見た。長く曳いた引き裾の、二枚重ねの褄さきは、柔らかい緑色の上履の爪さきにすっとなびいている、紫の被衣のともいろの紐は、小高い胸の上に結ばれて、ゆるやかに長く結びさげられている。

胸の張りかた、褄の開きかた、それは日本服であって立派な夜会服のかたちだ。肩から流れる袖のひだなど、実になめらかに美しい。そして、胸のふくらみから腰から脚へかけての線など、その豊饒な肉体の弾力のある充実を、めざましく、ものの美事に示している。

切子の壺のような女性だ、いろんな面を見せてふくざつにキラキラしている。

気の弱い男だったらあがってしまうだろうな。と、その個性の高い香気を讃美しながら、ひきつける魅力の本尊は何処かと、彼女の眼を見た。

彼女の双眼は、叡智のなかに、いたずら気を隠して、慧しげにまたたいていた。引き緊った白い顔に、黒すぎるほどの眼だった。もとより黒く墨を入れているのでもなければ睫毛に油をうけているのでもなく、深い大きな眼に、長すぎるほどな睫毛が濃かった。眉がまた、長くはっきりとしていて、表情に富んでいる。

――晴れ曇る、雨夜の、深い暗の底にまたたく星影――そんなふうに、彼女の眼はなんにも、口でいわないうちに何か語りかけている。

彼女が立ったとき、椅子のふちにかけた手は、妖しく光った。指輪にしてはあまりにきらめかしいと見ると、名も知らないような宝石が両の手のどの指にも煌めいているのだ、袖口がゆれると腕輪の宝石が目を射る、胸もとからは動くとちらちらと金の鎖がゆれて見える。

彼女の毛は、解いたならば、昔の物語に書いてある、御簾の外へもこぼれるほど長いに違いないほどたっぷりと濃いのを、前髪を大きく束髪も豊かに巻いてある。

「こうして、ちゃんとしてお目にかかるのははじめてだけれど、あなたはあたくしのことはよく御存じだから――たったひとつあなたには聴いておいて頂きたいことがあるのよ。」

彼女はあたしの友達の、箏の名人の浜子を見てつけたした。

「折角お招き申してもおさびしいといけないと思って、一番仲のよいお友達と御一緒にと申しあげましたの。」

一風も二風もある浜子は、その光栄を、軽く頭をさげておいて先刻のふくみ笑いをまだつづけている。

合客は、ある画伯の夫人と、婦人雑誌で名の知れた婦人記者磯村女史だった。その人が、欣々さんからの使者にたってて、出ぎらいだったわたしを引出したのだった。

「美人伝は、こちらがお書きになってらっしゃるから、いけないけれど――」

と、画伯夫人は、列伝体のものを、欣々女史の名で集めて残したらよかろうということを、しきりに勧めた。

「そういえば――」

と、それが言いたい、今夜の招待だとも知れぬように知れるように彼女は言いだした。

「あたしのように、血縁のものに縁の薄いものがありましょうか、あたくしの母は、十六歳であたくしを生んだといいますが、物心づいてからは、他人に育てられましたのよ、だから、生の母にも逢わずに死なせ、その実母の父親――おじいさんですわねえ、その人は、あたしが見たい、一目逢いたいと、それだけが願望だったというのにこれも隔てがあって逢わずに死なせてしまいましたわ。実父の家とは、父の死後に、義母姉妹の交わりをするようになりましたけれど――」

その、哀れなはなしは、わたしの小さな美人伝に書いたことなのでみんな知ってはいたが、いたましい思いに眼を伏せていた。

悲しい事実も、盛時の彼女には悲話は深刻なだけ、より彼女が特異の境遇におかれるので、彼女は以前から隠そうとはしなかった。ただしんぼうのならないのは、子供があるといわれることだと彼女はいった。

「私に、子供があってくれればですが、でも、ないものをあるといわれるのは、嫌なものねえ。ある時、あなたの子だと、名乗っているものがある、それが誠に美しい容貌の男の子なので、誰しもそれを疑わずにその者のいう通り、あなたの隠し児であるのかと信じている。という、便りをきかせてくれたものがあったのです、ええ拵らえものですもの、でも、驚きました。」

さまざまな手配をして、ようやく分明にしたのだといって、

「美しい人に似ているといわれた心地よさから、つい名を騙ったというのですの。その子供も、別段わるい心でではなかったが、ふと欣々の子だといったら案外大切にされたので、一度口にした効果がわすれられなかったからだと言う訳なの。」

けれど、厭な思いもしたし、かなり迷惑もした。人をもって警察の力も借りて、後々そういうことのないようにしてもらいはしたが――

「ほんとの子ならばしかたがないが誤伝て、いやなものねえ。」

白い袖の振りを、指輪の手でしごきながら話していたが、突然白い襦袢の袖をひっぱりだして、急いで眼にもっていった。その瞬間、たもちかねたような、大つぶの雫がこぼれるのを見た。

まあと、深く息をのんで、感動を現わし示したのは合客たちだった。浜子は黙して眼鏡をずりあげていた。わたしも気の毒さに面を伏せているよりほかなかった。

その間に、電話の鈴がひびいて取次がれた、彼女は輝く手でまぶたをおさえながら、

「あ、大臣の、尾崎さんの夫人からなら、どうか明日御覧にお出下さいまして。」

眼は濡れていて、声は華やかだった。

「折角の夜を、こんな話をしてしまって――お雛さまがおむずかりになるわ。」

用はもう済んだのだ、彼女は立って広間へ案内した。

広い客間の日本室を、雛段は半分ほども占領している。室の幅一ぱいの雛段の緋毛氈の上に、ところせく、雛人形と調度類が飾られてあった。

「御覧あそばせ。まるで養子のように、誰も彼も、これは僕のだこれは私のだと、場所を占領して飾りますの、みんな一揃いずつですもの。いまに、室いっぱいになってしまいますのでしょうよ。あんまり見ごとだって、それをまたいろいろの方が御見物にいらっしゃるので――明日は大勢さんをお招き申しましたわ。こんやは、あなたのためにだけよ。」

お雛さまの前に食卓がつくられてあって、みんな席へついた。

「あたくしねえ、給仕は、年の若い、ちいさい綺麗な男の子がすきです。汚ない、不骨な大きな手が、お皿と一緒につきだされると、まずくなる。」

ほんとに、その通りの少年が、おなじ緑の服を着て、白い帽子を頭において三、四人出て来た。

キュラソウの高脚杯を唇にあてて、彼女はにこやかに談笑する。

「今晩は、お雛さまも御洋食ですの。わざと、洋食にいたしましたのよ、自慢の料理人でございます。軽井沢へゆきますのに連れてゆくために、特別に雇ってある人ですの。」

その、御自慢の料理人が、腕を見せたお皿が運びだされた。

「明日は泉鏡花さんも見えるでしょうよ、あの方の厭がりそうなものを、だまって食べさせてしまうの、とてもおかしゆうございますわ。」

泥鼈ぎらいな鏡花氏に、泥鼈の料理を食べさせた話に、誰も彼も罪なく笑わせられた。

あたしは、鏡花さんが水がきらいで私の住んでいた佃島の家が、海※に襲われたとき、ほどたってからとても渡舟はいけないからと、やっとあの長い相生橋を渡って来てくださったことを思出したり、厭いとなったら、どんな猛暑にも雷が鳴り出すと蚊帳のなかでふとんをかぶっていられるので、ある時、奈良へ行った便次に、唐招提寺の雷除けをもっていってあげたことを、思出したりしていた。泉さんは、厭いといえば、しんから底から厭いな方だったのだ。鏡花愛読者が鏡花会をつくって作者に声援していたころだった。欣々女史も鏡花会にはいって、仲間入りの記念にと、帯地とおなじに機らせた裂地でネクタイを造られた贈りものがあったのを、幹事の一人が嬉しがって、

「此品、欣々女史の帯とおなじ裂れだそうです。」

とネクタイをひっぱって見せたのを、微笑ましくこれも思出していた。

すると彼女はこういっていた。

「ええ、ええ、たいへんでしたわ。おいしいおいしいって食てしまってから、たねを明すと、蝦いをなさるやらなにやら――」

介添えに出ている、年増の気のきいた女中が、その時の様子を思い浮べさせるように、たまらなくおかしそうにふうッといって、袂で口をおさえた。

食後はもうひとつの広間へ移った。そこはばかに広かった。琴が、生田流のも山田流のも、幾面も緋毛氈の上にならべてあった。三味線も出ている。

「こちらに、近衛家からか出た大層お古い、名箏があるようにうかがっておりましたが――」

と、はじめて浜子が声を出した。

「ああ、あれ御承知？　すぐ出させましょう。」

パチパチと手を打った。女中たちが顔を出した。浜子はちいさな声で、

「その箏でなんか弾いて見ましょうか、真っ黒になってて、鰹節みたいな古い箏だけれど、それは結構な音を出すの。」

虫の好い話で、浜子は他人さまの名器でよき曲を、わたしの耳に残してくれようというのだ。わたしも横道にも、

「やってよ、箏爪はなくたって好い。」

「いえ、それはあるにはある。」

浜子は、何処からか、たしなみの箏爪の袋を出した。なるほど鰹節のように黒く幅のやや細い箏の琴が持ち出されると、膝に乗せて愛撫した。毛氈の上では華やかに、もうはじまりだした。お対手の弾手や三味線の方の女も現れて来て、琴の会のような賑しいことになっている。

鼓の箱も運び出されて来た。鼓と謡は堂に入っているといわれている彼女だった。

「おやおや、この分では、仕舞まで拝見するのかもしれない。」

浜子は、むずとして、軽く古い箏の絃に指を触れながら、そんなしゃれを言った。

二

その名箏も、あの大正十二年の大震災に灰燼になってしまった。そればかりではないあの黒い門もなにもかも、一切合切燃えてしまったのだ。軽井沢の別荘から沓掛の別荘まで夏草を馬の足掻きにふみしかせ、山の初秋の風に吹かれて、彼女が颯爽と鞭をふっていたとき、みな灰になってしまった。

「衷が、あなたならお目にかかるというから、私の部屋に寄ってよ。」

と、あの時、大囲炉裡に、大茶釜をかけた前に待っていたむつむつしたような重い口の博士は諧謔家だったが、その人も震災後の十四年に亡なられた。

時代ははっきりと変ってしまった。欣々女史の栄華がなくなってしまったからとて、彼女の才能は決してにせものではない。だが、激しい世相の転回があった。世界的な思潮の動揺にも押しゆさぶられていた。

せわしさに、昨日の人を思出していられないというふうな、世の中の目まぐるしさだった。

ある日、浜子が来て、

「そこまで、江木さんが来たのだけれど、急がしいといけないから、また来ますって。」

「あら、帰ったの。」

あたしは惜がった、それはいつぞや、帰りぎわに、淡路町の邸で、静な室を二室抜いて、彼女の篆刻が飾ってあったのを見せられた時、どれか上げたいといったのを、またの時にと急いで帰ったばっかりに彼女の篆刻は、あすこに並べてあっただけは、一個も残らず焼失したことの惜さを、なぐさめてあげたい思いで一ぱいだったからであった。

欣々女史の書画——篆刻の技は、素人のいきをぬけて、斯道の人

にも認められていたのだ。

丁度、私は牛込左内町の坂の上にいて、『女人芸術』という雑誌のことをしている時だった。二階の裏窓から眺めると、谷であった低地を越して向うの高台の角の邸に、彼女は越して来ていた。浜子もあまり遠くないところに移って来ていた。

「もう直に、練馬の、豊島園の裏へつくった家へ越すので『女人芸術』のと、あなたのとの判をこしらえてあげたいって。」

そういった浜子は、何処かさびしげだった。自分も、横浜のとても好い住居も若い時から造らせた好い箏も、なにもかも震災の難にあって、命だけたすかった、身に覚えのある痛手なので、

「江木さんもさびしいでしょうよ。」

と、たった一人の孤独なので、此処まで来るにも、手提げを二ツ、鍵やら銀行の帳面やら入れてさげてこれは大切だといったと語った。あの女性が——と、聴くものも、いうものも、ただ顔を見合った。また、その次だった。もうその時分には、練馬の新築に越していたのだが、

「江木さんところから今朝、真新らしい萌黄から草の大風呂敷包がとどいたから、何がこんなに重いのかと思ったらば、土のついた薩摩芋で。」

と、浜子はおかしがりながら、何か気にかかるふうでもあった。

それから間もなく、彼女は自殺したのだ。昭和五年の二月二十日、京都の宿で、紋服を着て紫ちりめんの定紋のついた風呂敷で顔を被って、二階の梁に首を吊っていた。

彼女は、愛媛県令関氏のおとしだねで、十六歳の女中の子に生れた。明治十年の出生であったが、もの心づいた時は、京橋区木挽町、現今の歌舞伎座の裏にあたるところの、小さな古道具屋が養家だった。後に、養母は、江木家へ引きとられていたが、養家では、生みの男の子には銕職ぐらいしか覚えさせなかったが、勝気な栄子には諸芸を習わせた。

新橋に半玉に出たが、美貌と才能は、じきに目について、九州の分限者に根引きされその人に死別れて下谷講武所からまた芸妓となって出たのが縁で、江木衷博士夫人となったのだ。関家が東京に住み、令嬢のませ子さんが第一女学校に通学していた十五の時、江木衷氏の夫人はあなたの姉さんだといってると知らせてくれた友達があって、それが逢うきっかけとなった。けれど、もう父の関氏はこの世の人ではなかった。

今年の二月二十日、わたしはふと、ませ子さんに欣々さんの死ぬ前の様子がききたくなった。二、三日たって、相州片瀬の閑居に、ませ子さんの室にわたしは坐った。

ませ子さんも、清方画伯が「築地河岸の女」として、いつか帝展へ出品した美しい人である。病後とはいえ、ふと打ちむかった時、欣々さんにこうも似ていたかと思うほど、眼と眉がことに美しく、髪が重げだった。この女が、大学出の子息が二人もあって、一人は出征もしていられるときくと、嘘のような気のするほど、古代紫の半襟と、やや赤みの底にある唐繻子の帯と、おなじ紫系統の紺ぽいお召の羽織がいかにも落ちついた年頃の麗々しさだった。

「姉は惜い人でしたわ、育てかたと、教育のしようでは河原操さんのようなお仕事をも、したら出来る人だったと思います。死ぬのなら、もっと早く死なせたかった。あの通りの華美な気象ですもの。あの人の若いころって、随分異性をひきつけていました。

私がはじめて淡路町へいったころは、毎晩宴会のようでした。あっちにもこっちにも客あしらいがしてあって——江木の権力と自分の美貌からだと思っていたから。だから顔が汚なくなるということが一番怖い、それと権力も金力も失いたくない。それが、震災で財産を失したのと衷に死なれたのと年をとって来たのとが一緒になって、誰も訪ねて来なくなったのが堪らなかったらしいのです。よく私に、夫に死なれて後誰も来なくなったかと聞きました。お姉さまの周囲の人と、私の方の人とは違うから、私の方は今まで通りですというと、変に考え込んでしまって——財産がすくなくなったっていつでも他のものなら結構立派に暮してゆけるだけはあったのですし、今思えば、京都の方へ旅行するから一緒に来てくれないかといいました。そんなこと言ったことのない人でしたが、よっぽどさびしくなったのだと見えて、練馬の宅には離れも二ツあるから、一緒に住まないかとも言いました。二男を子にくれないかともいいました。けれどあんな気象の人ですからどこまで本気なのかわからないので誰も本気で聞かなかったので、あとでは強い人があれだけいったのには、いうに言えないさびしさがあったとは思いましたけれど——

そうそう、よく死ぬのは何が一番苦しくないだろう。縊死が楽だというけれどというので、いやですわ、洟を出すのがあるといいますもの、水へはいるのが形骸を残さないで一番好いと思うと言いますと、そうかしら、薬を服むのは苦しいそうだね。と溜息をついたりして、変だと思った事もあったのですが、大阪へいっても死ぬ日に、たった一人で住吉へお参詣に行くといって、それを止めたり、お供がついていったりしたら大変機嫌がわるかったのですって、それから帰って死んだのですが、あとで聞くと、住吉は海が近いのですってねえ。」

わたしは静にきいていた。故衷博士がこの姉妹ふたりを並べて、ませ子は部屋で見る女、栄子は舞台で見る女といったというが、わたしは、老年の衷氏の前にいる欣々女史は孫、もしくは娘のような態度で無邪気そうに甘えていたことを言って見た。

ませ子さんは言う。

「姉は利口でしたものね、気むずかしい方に、実によく勤めていました。」

衷氏が歿くなった時のお通夜や、仏事の日などは、ありとある部屋に、幾組といってよいかわからぬほどのお客をして接待した欣々女史、その新盆には、おびただしい数の盆燈籠を諸方から手向けられたのを家中の軒さきから廊下から室内の天井へずっとかけつらねさせたという、豪華なことのすきな彼女が、練馬の新築の家では、夜になるとピンピン、キシキシと、木材のひわれる音に神経を悩まして、いやだというように弱くなってしまったとは、美貌の誇りと、栄華の夢のさめぎわの、どんなにさびしいものかという底に、それよりほかの根はなんにもないであろうか？　あたしは否といいたい。

それは派手な気質もあったであろうが、あれだけの珍しい才能の人に賑やかしにばかり反れていった一面も見なければならない。あたしははじめてあったあの宵節句の晩の感想を、こんなふうに書きつけてある。

——まだ春寒い夜更けの風に吹かれて門を出ながら、しみじみと、この華やかな人の心のかげに潜む、どうしても払うことの出来ない、人世の果敢さというものについて考えさせられた。

そしてまた想って見た。真の幸福をつかむものには寂しさがあろ

うかと――。

青空文庫情報

底本：「新編　近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店
　1985（昭和60）年12月16日第1刷発行
　1993（平成5）年8月18日第4刷発行
底本の親本：「婦人公論」
　1938（昭和13）年4月
初出：「婦人公論」
　1938（昭和13）年4月
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2007年4月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

江木欣々女史

長谷川時雨

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/